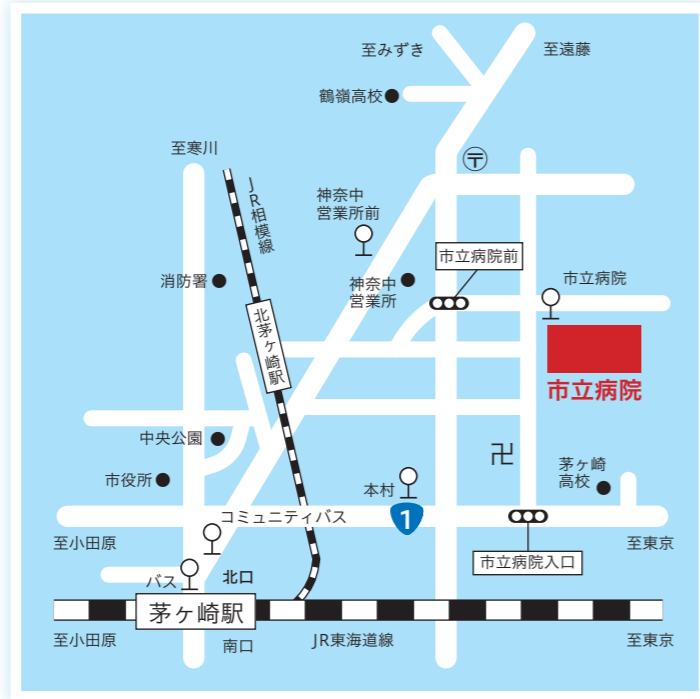


交通案内



電車をご利用の場合

東海道線 茅ヶ崎駅(北口)下車 徒歩25分
相模線 北茅ヶ崎駅下車 徒歩10分

バスをご利用の場合

JR茅ヶ崎駅(北口バスターミナル)より

■4番乗り場

室田循環(茅14)・高山車庫行(辻09)
藤沢駅北口行(藤21)
『市立病院』下車
藤沢駅北口行(藤07・08)・辻堂駅北口行(辻01)
『本村』下車徒歩10分

■1番乗り場

湘南ライフタウン行(茅03)・文教大学行(茅50)
湘南台駅西口行(湘11)
『神奈中営業所前』下車徒歩5分

■2番乗り場

鶴が台団地行(茅15)・松風台行(茅17) (茅81)
湘南みずぎ行(茅19)
『神奈中営業所前』下車徒歩5分

JR辻堂駅(北口バスターミナル)より

■6番乗り場

市立病院行(辻08)・茅ヶ崎駅行(辻09)
『市立病院』下車

コミュニティバスをご利用の場合

JR茅ヶ崎駅北口より

鶴嶺循環市立病院線(北コース・南コース)
『市立病院』下車

JR茅ヶ崎駅南口より

中海岸南湖循環市立病院線
東部循環市立病院線(松が丘コース)
『市立病院』下車

JR香川駅より

北部循環市立病院線
『市立病院』下車

JR辻堂駅西口より

東部循環市立病院線(小和田・松浪コース)
『市立病院』下車

P 駐車場は有料になります

- ・30分まで無料
- ・30分を超えて3時間まで200円
- ・3時間を超えた場合には30分ごとに50円

市立病院通信 令和4年9月1日発行 8.5号

発行/茅ヶ崎市立病院 ~ 健やか・共創 ~

〒253-0042 神奈川県茅ヶ崎市本村 5-15-1 TEL:0467-52-1111(代) FAX:0467-52-1133

茅ヶ崎市立病院 検索



Chigasaki Municipal Hospital [Newsletter]

市立病院 通信

令和4年9月1日発行 第8.5号

当院の取り組みや健康に関する様々な情報をお知らせします

市民の健康を守るため

地域の基幹病院として

特集

新しい市立病院

- 内視鏡センター
- 外来化学療法室

特別座談会

「新型コロナウイルス感染症と
今後の病院運営」

茅ヶ崎市立病院

胃カメラのイメージを一新 最新鋭の設備導入で、より快適な治療を

内視鏡検査室3室、透視下内視鏡室1室
新設のリハビリ室は10床を完備

— 2021年10月にオープンした、新・内視鏡センターの特徴を教えてください。

一つ目は、内視鏡検査室3室とレントゲンを撮りながら内視鏡を行う透視下内視鏡室1室の計4室とし、スペースを大きくしました。患者さんや医師・看護師の導線を計算した空間デザインとすることで、室内を行き来しやすい快適な検査環境を整えています。

二つ目は、10床を有するリハビリ室を新設しました。ここは、鎮静内視鏡検査を施行した患者さんが休む部屋として、患者負担の軽減につながっています。

三つ目は、内視鏡センター内に消化器内科外来を設置しました。当院の消化器内科外来で患者さんに気になる所見があった際には、すぐに内視鏡検査室の空き状況を確認し、必要に応じてその日のうちに検査や治療を行うことができます。

— 鎮静内視鏡検査は、患者負担をどのように減らすのでしょうか。

鎮静内視鏡検査は、検査直前に患者さんに鎮静剤を投与してから行う検査です。これまでは喉に局所麻酔をすることで嘔吐反射を起きにくくしてから胃カメラを行っていましたが、患者さんによっては反射が出やすい人もいました。

しかし鎮静内視鏡検査は、鎮静剤によって患者さんが眠ったような状態にして内視鏡検査を行うため、そうした反射は出にくくなります。実際に鎮静内視鏡検査を受けた患者さん

に話を聞いてみても「いつの間に検査をしたの？」と逆に質問されるほどで、一度この鎮静内視鏡検査を行った方は、次もそうしたい、と希望される方が多いです。検査後はすぐに帰っていただくというわけにはいかず、30分程度休んでいただく必要があります。リハビリ室を新設したことで外来の患者さんにもご利用いただきやすくなりました。

— 内視鏡センターの運用開始から10カ月（2022年8月時点）ですが、推移はいかがでしょう。

運用開始前の2021年4月から9月まで6カ月間で胃カメラ（GIF）は1,736件なのに対し、運用を開始した10月から3月までの6カ月間で2,166件となり、430件（24.7%）増加しています。また、大腸内視鏡検査（CF）も同期間で990件から1,417件の427件（43.1%）増加しました。検査数が増えることを予想はしていましたが、正直、これほどまで増えるとは想定していませんでした。これまで拾いきれていなかったニーズに応えることができるようになったという点でも、その意義は大きいと思います。

内視鏡検査予約フローを簡易化 患者の異変に素速く対応

— 地域の診療所からの内視鏡検査の予約フローも改善したと伺いました。患者さんにとってどのようなメリットがあるのでしょうか。

内視鏡検査をスムーズに行える予約フローの構築は、患者さんや地域の診療所にとって重要な視点だと考えていますし、この予約フローの改善



透視下内視鏡室の内観

INTERVIEW



センター長
栗山 仁

診療部長、内視鏡センター長(消化器内科部長兼任)。医学博士。専門分野は内視鏡治療、がん化学療法。日本内科学会総合内科専門医・指導医など。



内視鏡検査の様子



大きな窓で採光を確保

を求める地域の診療所からの声は多かったです。

今回改善した予約フローでは、鎮静内視鏡検査も、地域の診療所から当院の患者支援センターを経由して、直接、予約ができるようになりました。これによって、患者さんの容態を早く、詳しく知ることができ、患者さんの負担を軽減できます。また、同意書に鎮静内視鏡検査の同意項目を含むことで、検査の直前で「やっぱり鎮静内視鏡検査にしたい」という患者さんの希望にも臨機応変に対応できるようにしています。

胆道(あつな)・膵臓専門の医師が常駐 大学病院レベルの検査を茅ヶ崎で

— 市立病院では内視鏡的逆行性胆管膵管造影（ERCP）や超音波内視鏡（EUS）にも力を入れていますね。

ERCPは、口から内視鏡を入れて、胆管・膵管にカテーテルを通して造影剤を注入する検査です。また、ERCPは検査だけでなく、CTやMRI等ががんと疑われる腫瘍の細胞を採取することが可能なため、腫瘍の確定診断ができます。

当院はこれまでもERCPは行っていましたが、2019年から胆膵専門の医師が赴任したことで、より踏み込んだ高度な診断・治療が可能となりました。実際、赴任前の2018年度のERCP検査数

は年間284件でしたが、赴任後の2019年度は378件と飛躍的に伸びています。

これはEUSも同様で、2018年度に80件でしたが、翌年以降は毎年200件以上の検査を行っています。また、内視鏡センターの新設にあたり最新の造影超音波内視鏡装置を導入しました。胃や十二指腸から超音波を発して胆道や膵臓の検査をすることができます。膵臓がんは、大きくなるとすぐに転移をしてしまう厄介ながんのため、早期発見がその後の生存率を左右します。このEUSは1cm以下の腫瘍でも発見することが可能で、さらに内視鏡の先端から針を出して細胞を採取し、腫瘍の確定診断をつけることができます。

— 今後、どのような病診連携を目指しますか。

リハビリ室が整備されたこともあり、2022年4月から当院健診センターの人間ドックでも1日2件、鎮静内視鏡検査の受け入れを行っています。人間ドックの患者さんのニーズは「何もなければいいけれども確かめたい」という思いがあると捉えており、そういった患者さんこそ、負担の少ない手法で検査を受けていただけます。

2022年4月から大学病院で活躍していた胆膵専門の医師が当院に赴任しました。湘南東部医療圏の中で大学病院レベルの検査を行い、患者さんの人生の質（QOL）の向上に寄与していきます。

INTERVIEW



室長
嶋田 和博

化学療法委員長(乳腺外科部長兼任)。医学博士。専門分野は乳腺外科。日本外科学会専門医、日本乳癌学会認定医・専門医など。

「最新で安全な治療を、日常生活を変えずに」 広く・明るく・安らげる外来化学療法室へ

最新で安全な治療を「チーム医療」で提供

— 外来化学療法室とはどのような施設でしょうか。

外来化学療法室は、抗悪性腫瘍薬や生物学的製剤の点滴治療を外来で受けていただく専門の部屋です。近年、がん治療研究が飛躍的に進み、入院をいだなくても外来で治療ができるようになりました。外来は、入院費の軽減や、仕事や子育て、家事、家族との生活などの日常生活の維持ができるといったメリットがあり、厚生労働省でも外来化学療法の整備を推進しています。

一方で、外来化学療法は患者さんの自宅での状態が医師や看護師では把握が難しい部分があり、副作用の発見や対処が入院治療と比べて遅れる可能性があります。そうした時のために、予想される副作用の予防方法や、自宅でのセルフケアの方法など患者さんやご家族へ丁寧な説明を行うことが重要とされています。

— 茅ヶ崎市立病院の外来化学療法室の特徴は。

当院の外来化学療法室は、担当医師2名、薬剤師2名、がん化学療法認定看護師を含む看護師3名で構成され、消化器内科、乳腺外科、産婦人科、泌尿器科、外科、リウマチ膠原病内科、皮膚科の各専門医師の指示のもと、通年で安定した外来点滴治療を行っています。

医師や薬剤師、看護師、管理栄養士といった多職種が協同して化学療法を実施していくことは厚労省も推奨しているところですが、当院でも各診療科医師、薬剤部、看護部、化学療法室現場スタッフ、事務職を含め、医療チームが一丸となって最新で安全な治療と、緊急時における横断的な安全管理体制を構築しています。

10年後、20年後を見据え「使いやすさ」を妥協なく追求

— リニューアルしたポイントを教えてください。

これまでも当院は化学療法室を設置していましたが、2022年3月に本館1階にリニューアルオープンしました。以前は窓がなく閉鎖的な空間でしたが、新たな場所では以前の約3倍の広さとなる約140㎡のスペースを確保しました。病床も6床から、リクライニングシート9床、ベッド2床の計11床に増やしています。部屋の中央部にはカウンター型のスタッフスペースをレイアウトすることで、患者さんに万が一のことがあっても、すぐに対応できるようにしています。

また、時には数時間におよぶ点滴治療でも快適に過ごせるように患者さんにとって通いやすく、10年後、20年後も使いやすい環境づくりにもこだわりました。電源コンセントの位置にはじまり、光の強さや色味が調節可能な照明器具の導入、手元を明るく照らす読書灯、カーテンや壁の配色に至るまで、安心感を感じてもらえるようにこだわっています。私も座心地や寝心地を試した中から選んだリクライニングシートにはTVモニターを設置しました。また、今の時代、スマートフォンなどのタブレット端末を使用することは当たり前となっていますので、Wi-Fi環境を完備し、ご自身の端末で好きなテレビ番組や映画、電子書籍を読むこともできるようにしています。



広々とした室内。落ち着いた配色デザインで統一した

「通院が憂鬱にならないよう」 日常生活に溶け込む治療

— なぜそこまでこだわり抜いたのでしょうか。

一言でいえば、「通院が憂鬱にならないような治療室に」というのが我々の考えにあるからです。患者さんの視点に立ってみると、患者さんはがんの診断を受け、「治療のために仕事を辞め、入院費などでお金がかかり、これまでの私ではいられなくなるかもしれない」という精神的に辛い状況です。そんな中で化学療法を行う部屋は、窓もない閉鎖的な部屋だったとすると、何度も通ううちに通院・治療自体が苦痛となり、患者さん自身が精神的に「患者さんらしく」になってしまうことが予想されます。

そうならないように、最新で安全な医療の提供は大前提として、その上で、患者さんの仕事や子育て、家事、家族との時間といった日常生活をなるべく保ったまま治療を行えるようにする、日常生活の中に治療も溶け込んだ治療とすることが患者さんやその家族の心のケアにつながってくるのだと思います。

— 実際に運用を開始して、患者さんの反応はいかがですか。

まず利用者数ですが、病床数が増えたことか

ら2021年の月平均115人から、現在は130人前後まで伸びています。以前は、患者さんから「月曜日の午前中に治療を受けたい」と要望があっても満床のため別日をご提案していた部分もありましたが、病床数が増えたため患者さんの希望が格段に通りやすくなりました。患者さんの好きな時間に予約ができるということは、患者さんの生活を極力変えずに治療を続けてもらうという意味において、大切な要素だと実感しています。

また、実際にこちらを利用している患者さんからの投書でも「これまでは自分で持ち込んだ本を読むくらいでしたが、自由に時間を過ごせてとても快適です」との声をいただきました。非常にうれしいですね。

— 今後の方向性を教えてください。

この外来化学療法室は、一般的な疾患から希少な疾患まで幅広く対応可能という医療の質、患者さんが通いやすいという距離、そして治療を受ける時間を選べるという時間、この3点において快適な環境が整っていると思います。

今後は、現在の稼働する9床からベッドも含めた11床の完全稼働ができるように目指しています。また、治療だけでなく患者さん同士が親交を育めるサロンだったり、医師による講座や相談会の実現を目指しています。



TVモニター付きリクライニングシート

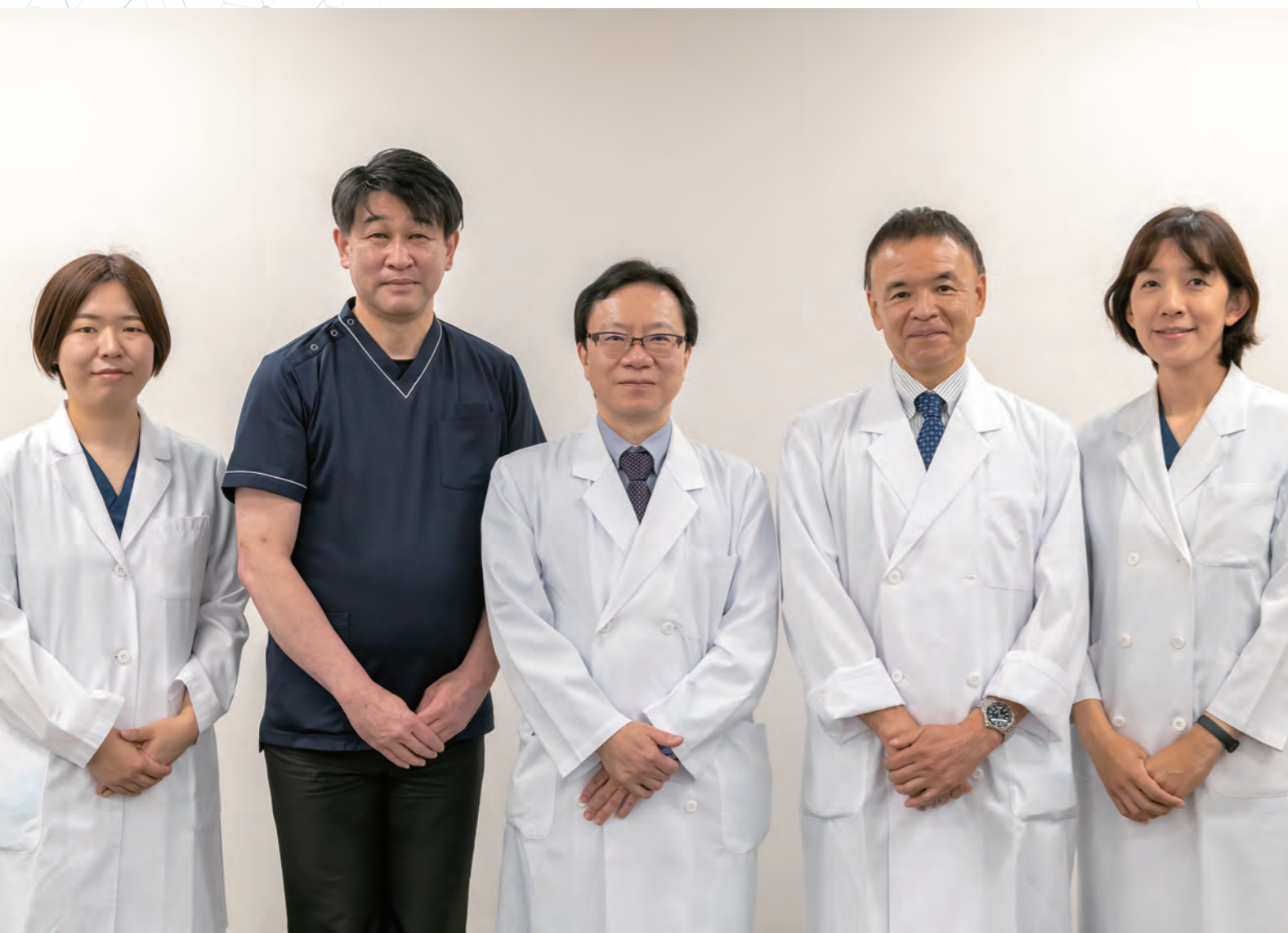


外来化学療法室の外観

新型コロナウイルス感染症と 今後の病院運営

瞬く間に世界を覆い、社会を一変させた新型コロナウイルス感染症（以下、コロナ）。この未知のウイルスに対し、茅ヶ崎市立病院はどのように対応したのか、そしてその教訓を今後の病院運営にどう生かしていくのか。2022年6月8日に座談会が開かれ、感染症対策の全体指揮を執った藤浪潔副院長、呼吸器内科として現場の診療にあたった福田勉中央診療部長と水谷和美医長、診療のサポートやクリニカルパスを整備した村田依子消化器内科副科部長、感染管理室の蘭賀都己担当長の5名が語り合いました。

（司会進行：患者支援センター猪瀬智奨）



呼吸器内科

水谷 知美

感染管理室

蘭賀 都己

副院長

藤浪 潔

中央診療部長

福田 勉

消化器内科

村田 依子

※撮影時のみ、マスクを外しています

市内唯一のコロナ陽性患者 入院受け入れ可能病院として

— 茅ヶ崎市立病院の現在の状況を教えてください。

藤浪 2020年1月末からの第1波から現在まで、感染者数が増加する波を6回ほど乗り越えて来たところですが6月8日現在、コロナの変異株であるオミクロン株の流行が収まりつつある状況で、発熱外来の患者数も減少傾向にあります。検査は、抗原の量を数値として測定することで高い精度で陽性・陰性の判別ができる抗原定量検査を採用しています。また、場合によっては1時間ほどで結果が分かるPCR検査を行っています。

蘭賀 これまでに当院を受診した患者さんは17,000人以上、入院時のスクリーニングは6,000人以上となりますので、総計23,000人以上検査をしています。

当初は疑似症の方の入院が陽性の方を上回っていた形でしたが、検査体制が整ってからはほぼ陽性の患者さんの入院となっています。

藤浪 診療体制においては、発熱外来を設置しました。現在でも、内科の医師を中心に、月曜日から金曜日の午前と午後診療を

行っています。

発熱外来の設置にあたり、空気感染や接触感染を防ぐために通常の患者さんと発熱外来の患者さんの出入口を分ける必要がありましたが、当院は本館の工事で旧総務課の場所が空いていたので、そこを利用できたのが発熱外来の迅速な設置につながりました。

当院は、新型コロナウイルス感染症対策の医療提供体制「神奈川モデル」の高度医療機関・重点医療機関協力病院に参加し、コロナ専用病棟を1病棟設けて対応を継続しています。第1波から第6波まで、市内唯一のコロナ陽性患者の入院受け入れ可能病院として全力でコロナ対応に取り組んでいます。

未知のウイルス、容態の急変 手探りで構築した診療体制

— これまでのコロナの対応を振り返るといかがでしょうか。

福田 振り返ると、2020年のあの激動から2年以上経ったんだな、という印象です。

呼吸器内科を受け持つ私にとって特に印象深いのは、2020年4月上旬に院内のコロナ対策会議で一般の患者さんとコロナ

感染とみられる患者さんを隔離しながら重症度の高いコロナ感染者の入院を受け入れていく方針を決めた直後のことです。方針を決めたその日のうちに、2名の患者さんが救急搬送されました。当時は未知のウイルスに対する対応方法が手探りだったため、まずは防護服やマスクを着用するなどの対策を講じながら対応しました。この搬送されてきた1名の患者さんには、酸素を目一杯15リットルを使い、出来る限りのことをしましたが、ECMO（体外式膜型人工肺）を持つ藤沢市民病院へ転送しました。

さらに息をつく間もなく救急搬送された50代の方は2日前に陽性の診断が出ていた方で、やはり酸素を15リットル使用し、藤沢市民病院へと転送しました。通常、50代の方がこれほど急変するのは珍しく、非常に驚きました。徐々に入院患者数も増加してきたことを受け、当院では呼吸器内科を中心に消化器内科や腎臓内科、代謝内分科の内科の医師や必要に応じて外科の医師も動員して診療体制を構築しました。

水谷 最前線の現場としては、特に患者数が急増した第5波（2021年6月頃～12月頃）が一番大変



発熱外来の内観



発熱外来は、対面、非対面のいずれでも診察できる環境を整備



我々は、いざという時の
覚悟が大切



副院長 藤浪 潔

副院長として院内の診療体制構築や発熱外来の設置等、市立病院のコロナ対策の全体指揮を執る。専門は泌尿器悪性腫瘍。日本泌尿器科学会専門医・指導医、日本がん治療認定医など。

クリニカルパスで
医療の均質化を



消化器内科 副科部長 村田 依子

発熱外来や診療など呼吸器内科のサポートや医療の均質化に欠かせないクリニカルパスの作成に携わる。専門は炎症性疾患、癌化学療法。日本内科学会総合内科専門医・消化器病専門医・消化器内視鏡専門医など。

んだクリニカルパスを作って、医療の均質化を目指しました。

水谷 村田先生のように、呼吸器内科の専門医師ではない方のサポートは特に助かりました。コロナは消化器系の症状や、重篤化するリスクファクターに糖尿病があることが徐々に分かってきたので、カンファレンスなどに消化器系や腎臓系の専門医師がいると、治療方針に悩む時でも迅速に相談・治療ができました。患者さんの全身管理を安全に行っていくという点で心強かったです。

福田 こうした状況の中で、隔離病棟で働く我々や看護師、事務職員を含めて2020年から2年以上、医師や看護師のクラスター感染は一度ありましたが、緊張感をもって診療や治療に当たることができ、誇れるところも大きいと考えます。

蘭賀 感染管理室としては、医師や看護師、委託清掃員など関係者全員に向けてPPE（個人用防護服）の着用方法など感染を防ぐための教育・啓発活動を行いました。また、ソーシャルディスタンスの距離をメジャーを使って測定し研修会場・会議会場を設置したこともありました。

当時は感染していた場合に感染拡大を防ぐために、コロナ病棟を担当する看護師は3週間勤務し1週間休むといった勤務形態としました。看護師の中には「家族への感染を防ぐために家に帰らない」と判断してアパートを借りたとも聞いております。また、病院の寮に住んだりして働く方もいました。コロナの対応後には感染を防ぐためにシャワーを浴びたい、という声もあったため、シャワー室を開放するなどメンタルケアにも取り組みました。

福田 それに、Web会議システムに

よるリモート研修や病院内の安全講習を動画などで学ぶeラーニングを行い、「密集・密閉・密接」を避けつつ、効果的に情報共有を行いました。聴講者の時間に合わせて視聴ができるという点で、むしろ聴講率が上がったのは思わぬ副産物ですね。私も学会や総会にはリモートで参加し、以前よりも学会に参加できるようになりました。

藤浪 飛沫感染や接触感染に加え、空気感染もあるとすると、空気が外に漏れないようにする陰圧室を整えなければならないため、まず本館救急外来に整備を行いました。

また、資材の枯渇も深刻で、市内唯一の公立病院といえど、マスク不足に陥ることもありました。治療法が不明なこと、そして資材の不足のダブルパンチは堪えませんでした。

蘭賀 実はいよいよマスクが不足する、という時に備えて感染管理室では、使用済みマスクを回収して滅菌作業を行い、再度使用することが可能か実験をしていました。幸い再利用マスクが実用化される前に資材供給が復活してきたので実用化はされませんでした。ただ、それだけ深刻だったということです。

村田 あの時は何が正しくて、何が間違っているか本当に分からなかったですね。

蘭賀 そうですね。中には発熱外来を担当した後は、靴底にウイルスが付着しそこから広がっていくことも考えたスタッフが靴裏を消毒して歩くような光景もありました。とにかく、やれることはすべてやる、という状況でした。

藤浪 現場の不安も相当だったのでしよう。感染管理室に次々と、「これはどうする、あれはどうする」

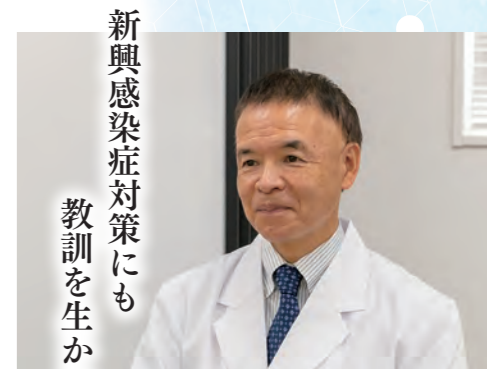
と質問が舞い込んできていたのを覚えています。正直、我々も錯綜する情報の中でどうしたらいいか判断に悩むこともありましたが、それは国も同じで、厚生労働省からの通達に従って判断を下しても、その週末、しかも深夜に、以前の指示とはまるっきり異なる通達があった、なんてことはしょっちゅうでした。病院内で運用するためには通達内容をマニュアル化し、分かりやすく事細かに作る必要があるのですが、それを何度もひっくり返されるのは辛かったですね。感染管理室では、蘭賀担当長をはじめ、ほぼ毎日、感染管理室に集まってさまざまな判断を下していました。今でも感染者はいますが、治療法や感染対策がある程度確立していますので、もし次の波が来たとしても迅速かつ適切に対応する体制の整備を進めています。

病院・保健所・医師会の連携 市民からの心温まる支援

— 病院と保健所の連携、病院と地域の診療所との連携の側面ではいかがでしょうか。

藤浪 茅ヶ崎市は、市が設置主体の保健所があるので、病院と保健所が1対1でスムーズにやりとりができました。ワクチンの手配一つをとって見ても、当院の患者支援センターや医事課、総務課などが、病院と保健所の橋渡し役を担ってくれて、迅速に手配をすることができました。市が所管する保健所があることは、こういったパンデミックが起きた際に、とても大きな強みであると思います。

茅ヶ崎医師会との連携は、2020年の夏過ぎごろから、「地域の診療所でも陽性とみられる



新興感染症対策にも
教訓を生かす

中央診療部長 福田 勉

コロナ診療の最前線を担う呼吸器内科の科部長として診療体制構築に尽力する。専門は呼吸器内科一般。日本内科学会認定内科医・総合内科専門医・指導医、日本呼吸器学会呼吸器専門医・指導医など。



専門医の視点で
患者さんに安心安全を

呼吸器内科 医長 水谷 知美

外来・入院患者の診療を担い、未知のウイルスに対し複数の専門医の意見を総合しながら患者の安全管理を行う。専門は呼吸器内科一般。



職員の
実務指導と
メンタルケア

感染管理室 担当長 蘭賀 都己

院内外の感染拡大を未然に防ぐため、研修等の安全指導や院内の感染対策全般を担当している。感染管理認定看護師。

患者を診察できるようにしていく」と方針を示してくれたことで、患者さんの診療の面でもスムーズに行うことができるようになったと感じています。それにPCR検査は、夜の部の担当を医師会の先生方に担っていただくことで当院の負担をかなり軽減できました。改めて感謝申し上げます。

茅ヶ崎市ほどの規模の自治体で、市立病院と保健所、医師会が地域内で完結しているところはなかなか無いと思います。さらに当院の事務方がすごくこまめに連絡を取ってもらったことで、それぞれが連携して、スピーディーかつ確に対応を進めることができました。

蘭賀 「連携」というと少し違うかもしれませんが、「これだけしかないけど使って」とマスクやお花・千羽鶴などの寄付をお寄せいただいた市民の方々や企業には心が温まり、癒され、助けられました。この場を借りて、お礼を申し上げます。

再確認した公立病院の重要性 市民の健康と安全を守る「覚悟」

— コロナ禍を通して得たものとは一体なんだったのでしょうか。

福田 SARSやMARS、新型インフルエンザ、そしてコロナ。新型ウイルスの出現と感染拡大は、人類の生活エリアの拡大と人的交流の活発化に影響を受けますから、これだけ頻りに感染症が出てくるとなると世界が狭くなっていると感じます。また、今後も新興感染症が出てくるのは想像に難くありません。ただ、今回のコロナのように当院の各専門の医師、看護師、事務職員、保健所、地域の診療所が一体となることができれば、今後の新興感染症も乗り切ることができるはずです。

村田 福田先生のおっしゃる通りで、今回は肺炎が主な症状だったので呼吸器内科が中心となって対応しましたが、今後また別の新興感染症が発生し、

その病状が消化器系でしたら、私の所属する消化器内科が中心となります。そうした時に、中心を担う診療科とそれをサポートする診療科のような病院全体の医療体制を構築して、病院が一丸となってコロナに対応してきたという経験は、今後も生きてくるはずです。

藤浪 大切なことは、今回を教訓にして、BCP（業務継続計画）を改めて見直して、大規模なパンデミックや新興感染症の出現も見越したBCPを作らないといけないということです。そして私たち医療職は、いざというときに覚悟を持つことが大切です。公立病院である茅ヶ崎市立病院が率先して、市民の健康と安全のために頑張っていかなければいけないと思います。

— 本日はありがとうございました。



PPEの着用風景



茅ヶ崎市の集団PCR検査会場の運営にも協力



コロナ専用病棟の廊下に設置した空気感染隔離ユニット

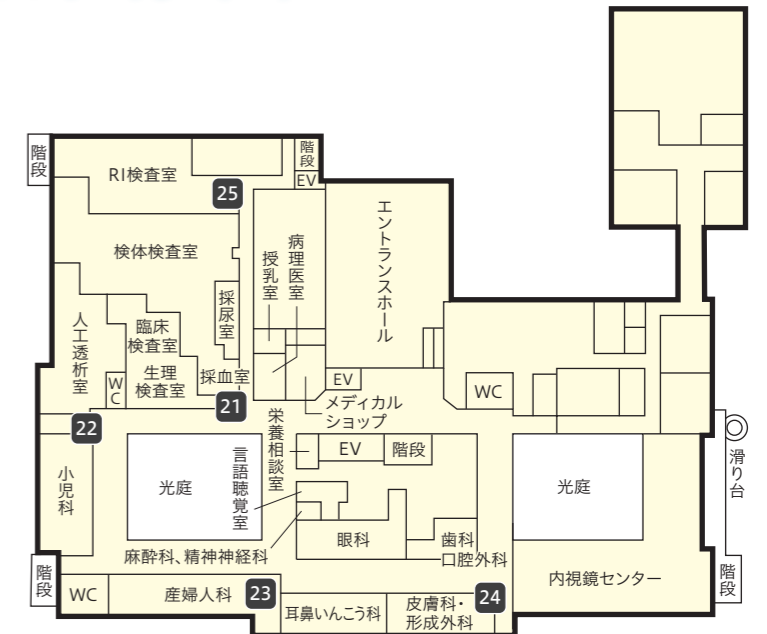
職員へのPPE着用方法などの感染を防ぐための教育や啓発だけでなく、コロナ専用病棟の廊下へ空気感染隔離ユニット設置や発熱外来の整備など、ソフト面だけでなく、ハード面の整備も行いました。

また、コロナ感染症患者の受け入れだけでなく、茅ヶ崎市の集団PCR検査会場の運営にも協力しました。

フロアガイド

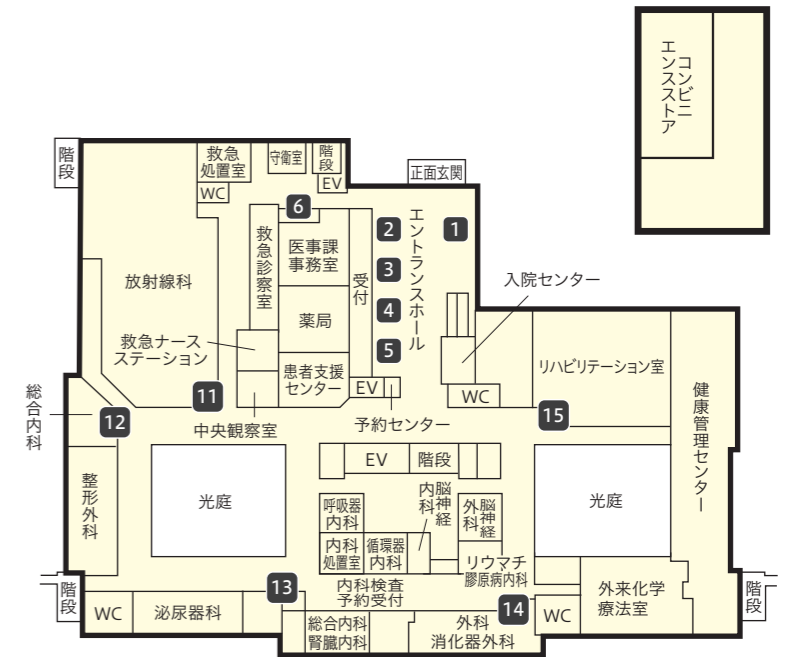
2F

- 21 検査科
採尿、採血、超音波検査
心電図、脳波、呼吸機能
- 22 小児科、人工透析
- 23 眼科、産婦人科
耳鼻いんこう科
精神神経科、麻酔科
- 24 皮膚科、形成外科
歯科口腔外科
- 25 放射線科、RI検査



1F

- 1 受診相談
- 2 再来受付、保健確認窓口、予約併診窓口
- 3 新患受付、紹介患者受付、各種書類受付
- 4 会計窓口、計算窓口
- 5 薬局窓口
- 6 夜間・休診診療、入院受付
- 11 放射線科、X線、CT、MR
- 12 整形外科、総合内科
- 13 腎臓内科、代謝内分泌内科
消化器内科、泌尿器科
呼吸器内科
- 14 一般外科、消化器外科
呼吸器外科、脳神経外科
乳腺外科、リウマチ膠原病内科
循環器内科、脳神経内科
- 15 リハビリテーション科
リハビリテーション室



B1F

- B1 放射線科
CT、MR、治療

